

平田ロータリークラブ 週報

平成17年7月14日

No.1524

発行日 毎週木曜日

超私の奉仕

国際ロータリー会長 カール・ヴィルヘルム・ステンハマー
第2690地区ガバナー 延原 正

△事務局▽

島根県出雲市平田町2280-1
平田商工会議所2F TEL 0853-63-3232
FAX 0853-63-5365
A.M. 9:00 ~ P.M.5:00 土・日曜・祝祭日休局

会長 大谷 孝 副会長 加藤喜久
幹事 内田節夫 会計 加藤昇

例会プログラム

例会	卓話者	演題
第1524回	土江和世様	この子ありて……
第1525回	各委員長	クラブ協議会
第1526回	前年度会計 高砂明弘・本年度会計 加藤 昇	〃

出席報告

会員数	出席者数	欠席者数	出席率	前回補正率
50	40	10(1)	81.63	—

欠席者 持田・伊藤・木佐・山根・大島卓・西谷・園・堀江・三代(杉原)
来訪者 古瀬G補佐・山本グループ幹事・矢田・廣原(出雲中央)
M U 7/10内田・田中浩・飯塚大(RAC)・7/12石原恵(松江しんじ湖)

幹事報告

- 出雲市5RC合同例会のご案内
8月3日(水) 18:30~20:30 於) 出雲ロイヤルホテル
登録料 5,000円 当日はパスを用意します。
本日、出欠表を回しておりますので、ご記入下さい。
(8月4日の例会を8月3日に変更致します)
- ひらたCATV(株)より開局のご挨拶状をいただきました。

スマイル

古瀬ガバナー補佐 この度、ガバナー補佐の大役を拝命し、その責任の重さに身が縮まる思いがしております。RIの目標と延原ガバナーの方針を正しくお伝えし、少しでも地区のお役に立てればと思っております。皆様のご支援、ご指導を宜しくお願いいたします。

矢田・廣原(出雲中央) 初めておじゃまいたしました。今日は古瀬G補佐、山本幹事共々よろしくお願いいたします。8月3日の合同例会、お待ちしております。

加藤昇・松浦・平野 土江和世先生ようこそいらっしゃいました。スピーチを楽しみにしています。

河原・佐々木・森山 古瀬G補佐、ようこそおいで下さいました。

大谷・榎野・内田 古瀬G補佐・山本グループ幹事様、ようこそおいで下さいました。矢田様、廣原様ようこそおいで下さいました。

渡部 古瀬G補佐、山本グループ幹事をお迎えして。土江先生ようこそ。

常松 本日のスピーカー土江和世様、ようこそいらっしゃいました。

牧野 古瀬G補佐様一年間よろしくお願い致します。榎野前会長、黒田前幹事、ご苦労様でした。大谷会長、内田幹事のご活躍を祈っています。

高砂 矢田様、お久しぶりです。ご活躍をお祈りします。

飯塚大 土江和世様をスピーカーにお迎えして。プログラム委員長、一年間宜しくお願い致します。

7月28日例会受付担当

飯塚大幸・加藤喜久・木佐彰三

- | | | |
|-------------|----------------|---------------|
| ★松江南クラブ(月) | ★出雲クラブ(火) | ★平田RAC(第1・3水) |
| ★出雲中央クラブ(月) | ★松江クラブ(水) | ★松江東クラブ(木) |
| ★松江しんじ湖(火) | ★大社クラブ(水) 7/20 | ★出雲南クラブ(金) |

会長挨拶

“超我の奉仕”の“超我”とは？。この哲学の様な言葉の意味は？最近入会された人には初めて聞かれる人もあるかも知れません。私も入会時、ロータリーは超我の奉仕といわれ、それを問うたのですが、十分な説明を得られず、私はよく理解出来なかったことを思い出しています。

今年度のR Iのテーマとなり改めてそれを見ますとservice＝奉仕、above＝…以上に、超えて、self＝自分、まさにservice above selfの直訳ではありませんか。

今春の次年度会長研修会の懇親会（当時の役職名）原ガバナー、延原ガバナーエレクトに“超我の奉仕”とは哲学の用語を感じて分かりにくい、英語の直訳ではないですか？もっと分かりやすい表現はないのか、そして、その意味、“心”は？端的に言えば“無心の奉仕”、“懸命に奉仕につとめる”と言うことですねとたずねました。原ガバナーは私の手を取り“まさにその通りです”それが分かれば立派なロータリアンと大変なおほめを頂きました。

延原ガバナーエレクトは、日本のロータリーは当初は金がなく、よい翻訳者を雇うことが出来ず、この様になっている。あなたの言われる通りですとの事。私は自分の考えでよいと意を強くしました。

そして更に私はロータリーは米国生まれの米国流です。世界各国にはそれぞれの歴史、文化、伝統、言葉があり、それをふまえてのわかりやすい表現、翻訳をお願いしたいと言いますと、回りの人々が賛同してくれました。

スピーチ

この子ありて

土江 和 世 様



二人目の子どもがお腹の中にいるとき、勤務先の幼稚園で転んで、当時8ヶ月目のお腹を強く打った。その後、その長男を出産したが、あるとき、他の子どもとわが子の成長の違いを意識するに及び、初めて長男の障害を意識することになった。障害というのもひとつの個性であり、健常者にはないパワー、生きる力を持っている。障害を持った長男によって自分は随分たくさんのお話を学び、それまで知らなかった世界を得た。

「わんぱく学園」は知的または身体的に障害をもった子ども達を主役にしたサークルであり、学園誕生は昭和63年。きっかけは長男が放課後、友達と過ごす場や機会がなかったため、主人と共に障害をもった子ども達の集いの場をつくろうと周囲に呼びかけたことから。一部ではタブー視する声もあったが、わが子のハンディを認めたくないという親の思いだからこそ、子ども達に必要なものをつくるのが大切と何度も足を運び対話を続けるうちに、賛同の声も広がった。

その後、松江市や出雲市、斐川町など周辺地域の子ども達も仲間入り。戸外でのびのびと遊ぶ子ども達の姿や学園の活動内容に共感した通級学級の先生、陶芸家、画家、音楽家など様々な分野の大人たちも加わって活動の輪が広がっている。

「子育ては待つこと、ありのままを受け入れることが大切じゃないかしら。私はそのことを長男に教えられ、ぼちぼちリズムでの子育てを心がけてきた」

8月2日(火)～7日(日)「純粹芸術と子供たち ～アートは遊び心～」と銘打って、島根県立美術館の市民ギャラリー（入場無料）で彼らの作品を紹介する予定である。巨大絵画、抽象絵画、5トンの粘土によるオブジェなど。是非見に来てください。

(文責/飯塚大幸)